

バンド活動への諦めきれない思い  
—活動引退という決断に焦点を当てての検討—

**【研究目的】**

本研究では、オリジナルロックバンドの活動の体験と、活動停止に至った経緯に焦点を当て、バンド活動をした後に、バンド活動を辞めたことに対しどのように感じたのかということから、バンド活動への諦めきれない思いを明らかにした。具体的には、1) バンド活動を始めた経緯、2) 活動内容と活動の心情、3) バンド活動を辞めるという決断と辞めたことに対する思い、4) 音楽活動をする上で諦め切れないこと、に関して検討した。

**【研究対象者・研究手法】**

本研究では、現在 30 歳以上 40 歳未満の年齢で、バンド活動で生計を立てていた期間が 3 年以上あり、すでにバンド活動を辞めた方を対象とした。対象者 3 名に 30～60 分程度の半構造化インタビューを実施した。インタビューは録音した後、逐語に起こし、ナラティブ分析を行った。

**【分析結果・考察】**

当事者の語りから、3 名とも中学生や高校生の時には、将来的にバンド活動をするという思いがあった。しかし、3 名ともバンド活動を始める経緯や時期、バンドでの活動内容では異なる点がみられた。バンド活動をするに対しての、3 名のバンド活動へ向き合う姿勢や、バンド活動への思いが明らかとなった。

3 名ともバンド活動を引退したことに対して、寂しいという思いが明らかとなった。引退の理由としては、体力的に厳しかったことや、バンドメンバーの脱退によってバンド活動を継続することが難しくなったことが挙げられた。音楽活動をする上で、3 名とも、バンドメンバーとの人間関係や、自分自身の選択といった、バンド活動で生計を立てていくこと以外での、各々が大切にしている諦めきれない思いが明らかとなった。

バンド活動は、楽曲やライブという「作品」を作る活動であるが、活動をするためには、バンドメンバーとの一体感が必要であり、メンバーの誰かが抜けてもバンドが成り立たなくなることから、「バンド」自体が一種の作品となっている様子が窺えた。

## 無宗教者の祈りの行為に関する考察

－現代の無宗教者の祈りのかたち－

### 【研究目的】

本研究の目的は、特定の宗教を信仰していない無宗教者が、自らの人生における重要な局面に立たされたときに行う祈りについて検討することである。具体的には、1) 直面した問題や困難はどのようなものだったか、2) 直面した問題にどう対応したか、3) どのような思いで宗教施設に足を運んだのか、4) 祈ることで自身の状況に対する気持ちにどのような変化があったか、5) 経験された問題は、その後どのように収束したか、6) 一連の経験を現在どのように捉えているか、に関して検討した。

### 【研究対象者・研究方法】

本研究はインタビュー調査を用いて行った。インタビュー対象者は、日本に住む、自らを無宗教者であると認識している 20 代の方とした。予期せぬ問題やトラブルが原因で、人生における重要な局面に立たされたときに、教会や神社、寺院などの宗教施設に足を運び、祈った経験をもつ者を対象とした。就活、受験、出産など事前に想定されたライフイベントでの祈りは本研究の対象から外した。

### 【分析結果・考察】

当事者の語りから、1) 自らの育った環境に影響を受けながら無宗教者を自称している対象者が、2) 自身の力では解決することのない問題を受け、3) 心の救済のための祈りを捧げたことが明らかになった。当事者は、教義化された宗教に対する信仰のみを宗教信仰とし、自身の祈りを宗教行為と区別していた。

当事者の直面した問題は、いずれも自力での解決を目指すことが不可能なものであったが、当事者は問題に対する不安や焦燥感を軽減するため、独自の対処行動をとっていた。

また、当事者は祈ることによって自身の心理状態の良好化を期待していた。祈りの行為自体が癒しの効果をもたらすという考えの下、自身の直面する問題の根本的な解決のためではなく、心の救済措置として祈りの行動をとったことが明らかとなった。

## 大学体育会系部活動のキャプテン経験の検討 ～人間関係上の困難とその困難への対処に焦点を当てて～

### 【研究目的】

本研究では、大学体育会系部活動のキャプテンを務めた者が、部活動を統率する中で感じた人間関係上の困難、及びその困難にどのように対処したのかを検討する。部活における人間関係は、必ずしもいつも良好なわけではない。キャプテンが経験する人間関係上の困難の例としては、活動への取り組みに対する先輩一後輩間の見解の相違や、部活の運営方針をめぐる部員間の意見の相違、部活のOBとの連携上の困難などが挙げられる。キャプテンは統括が難しい部員や部の関係者の人間関係を鑑みながら、競技チームをまとめ、部活を円滑に運営しなければならない。本研究では、キャプテンが経験した部活内での人間関係上の困難や課題に焦点を当てつつ、キャプテンがどのように部員の関係性に目配りしながらトラブルに立ち向かったのか、どのように部活という共同体を維持しようとしたのかを検討する。インタビュー調査においてキャプテンを務めた経験のある者の体験の語りを収集し、当人がキャプテンであった当時、部活リーダーとしての自分自身をどのように捉えていたのかについて考察を行う。

### 【研究対象者・研究方法】

1) 大学体育会系部活動のキャプテンを務めた期間に体験した人間関係上の困難やその対処について、すでに心の整理がついている方、2) 5年以内にキャプテンを退いている方、3) キャプテンとして通年活動し、キャプテンであった期間が1年以上2年未満であった方、4) 部活動の規模は、部員数が競技を行う上での定員を満たしており、他大学との連合チームではない部活動を対象とし協力者を募った。4名を対象にインタビュー調査を実施し、インタビューの内容は録音したうえで逐語録に起こし、ナラティブ分析を行った。

### 【分析結果】

本研究では、大学体育会系部活動のキャプテンが経験した人間関係上の困難と困難への対処に注目して検討した。対象者の語りからは、人間関係上の困難への対処について、キャプテンが効果的な対処ができたと思わずも考えていないことが判明した。対象者らが人間関係上の困難に遭遇するときは大抵、困難を引き起こしている二者間の仲介役として対処を施している。困難に対処しようとするキャプテンと困難を引き起こす部員は学生同士であり、キャプテンも部の人間関係に配慮する必要があるため、立ち入った対処は難しい。

キャプテンが困難に対処しようとするときに、キャプテン自身がキャプテン業と選手としての活動を両立していると、部員に対してより深く関わって対処をすることができた。キャプテン業をこなすためには、キャプテン就任以前から部活の中核に携わり、周囲から部活のリーダーとしてキャプテンを迎える視線を獲得していることが重要であった。キャプテン業を選手としてのやりがいや責任感という形で還元することで、キャプテン業と選手としての活動の二つを両立しており、キャプテン活動に意義を見出していた。

## 女子高校生の友人関係構築に関する検討

-グループ移動に焦点を当てて-

### 【研究目的】

本研究では、女子高校生の「もともと所属していた友人グループから、別の友人グループへと所属を変える」というグループ移動の体験に焦点を当て、女子高校生が安定した関係の友人グループに所属する過程を当事者の体験をもとに明らかにすることを目的とした。具体的には、1) グループ移動前の友人グループへの所属、2) 友人グループの条件、3) グループ移動がもたらしたものに関して検討した。

### 【研究対象者・研究手法】

研究の対象は、高校時代にクラス内で所属友人グループの移動を経験したことのある、20代前半の女性を対象とした。移動前の友人グループで過ごした期間が1か月以上の方を対象とした。グループ移動をしたときの学年は問わない。友人グループの人数は3人以上とする。なお、所属友人グループを離れることで、学校生活が送れなくなるほど強い心理的ストレスを感じた方は、対象から外した。計4名の対象者に対し、30～60分程度で半構造化インタビューを行った。インタビュー内容は同意を頂いた上で録音し、逐語録を作成後、ナラティブ分析を行った。

### 【分析結果・考察】

#### 1) グループ移動前の友人グループへの所属

当事者の語りから、グループ移動前の友人グループに所属する理由は一人になることを避けるためであった。ひとりになることを避ける理由は、周囲の人々から「社会に馴染めない人」などのマイナスイメージを持たれることを避けるためであった。

#### 2) 友人グループの条件

当事者はグループ移動前の友人グループを脱退し、会話がしやすい友人グループへとグループ移動をした。友人グループメンバーと一緒にいる時間は主に休憩時間であり、休憩時間は友人グループで話をしていることが多い。グループ移動前は会話らしい会話ができていなかった当事者にとって、話しやすさや、話題の好みが合うことは友人グループに所属する重要な条件であったといえる。

#### 3) グループ移動がもたらしたもの

当事者はグループ移動によって本来の自分を出せるようになった。会話が滞っている友人グループから会話のしやすい友人グループへ移動したことで、本来の自分が出せるようになったということから、会話を重ね、信頼関係を築くことで、ありのままの自分を出せるようになることが推察された。

## 帰国子女が体験する日本での学校生活

### ：アメリカ帰国子女の語りの検討

#### 【研究目的】

本研究では、アメリカ帰国子女の帰国後の体験に焦点を当てる。アメリカからの帰国子女が体験した、帰国後の学校生活について明らかにすることを目的とする。具体的には、アメリカからの帰国子女が、1) 帰国後の学校生活をどのように体験し、2) 学校生活の中で感じた戸惑いにどのように折り合いをつけ、3) 帰国子女としての自分をどのように受け止めているのかを検討する。

#### 【研究対象者・研究手法】

アメリカに3年以上滞在してアメリカの現地校に通い、小学校高学年から高校生時の間のいずれかの時期に帰国し、日本での学校生活に戸惑いや困難を感じた現在20代のアメリカ帰国子女の方を対象とした。計3名の対象者に対し、30～60分程度で半構造化インタビューを行った。インタビュー内容は同意を得た上で録音して逐語録に起こし、ナラティブ分析を行った。

#### 【分析結果・考察】

帰国子女は、海外生活中に得た価値観や振る舞いが日本では受け入れられないと感じていた。同時に、彼らは帰国後の学校生活において、周囲からの帰国子女に対する先入観にさらされていることが分かった。

対象者たちは周囲に理解を求めようとはせず、自分が変わることで戸惑いと折り合いをつけていったことが明らかとなった。しかしその背景には、先入観を持たれることに対する諦念や、アメリカで身につけた価値観や振る舞いをねじ曲げることへの抵抗感があり、否定的な感情を持ちながらも変わらざるを得なかったことが示唆された。

帰国後の学校生活を体験した帰国子女は、海外生活を経て体得した価値観および言動や、自分が帰国子女であるという事実自体が周囲に露見することを避けたいと捉えていることが明らかになった。アメリカと同様の振る舞いをしたために悪目立ちしたことや、周囲の持つ帰国子女像に振り回されたことが、彼らが帰国子女としての自分を隠そうとする要因であると考えられる。

## コロナ禍における大学部活動

### —活動休止期における体育系運動部員のモチベーションの検討—

#### 問題・目的

本研究では、コロナ禍で部活動休止を経験した、体育会系運動部の部員の体験を検討することを目的とした。具体的には、(1)大学部活動に求めているもの、(2)他者との関係、(3)活動休止を経ての気づき、に焦点を当てて検討を行った。コロナ感染拡大という状況下で、大学生はどのように部活動へのモチベーションを維持したのかを明らかにすることで、大学生にとっての部活動の意味と意義を考察した。

#### 方法

本研究の対象者は、大学の体育会系運動部でプレイヤーとして活動しており、コロナ禍で部活動が休止になった経験を持つ者とした。また、対象とする部活動は、通常時の活動日数が週3日以上である体育会系運動部に限定した。対象者4名に半構造化インタビューを行った。録音したインタビュー内容を逐語録に起こし、ナラティブ分析を行った。

#### 結果・考察

大学生は、大学の部活動に「自分が努力できる環境」を求めているということが明らかになった。「自分が努力できる環境」の具体的なあり方については個人差がみられたが、条件のなかには共通する点も見出された。4人の対象者の語りからは、練習のあり方が重要であるということが明らかになった。また、2人からは、仲間の部活動への向き合い方も、部活動で努力するためには重要であるということが示された。さらに、部員は活動休止期間に他者とのつながりを重視しており、そのつながりを獲得する過程で、「新たに他者とのつながりを求めて行動した人」、「今までのつながりをより深めた人」に分類できることが示唆された。部員はソーシャルサポートといった外からの働きかけによって、部活動に対するモチベーションを維持していた。対象者の中には、他者と一緒に練習する方がやりがいはあると感じていたにもかかわらず、活動休止期間を通して一人で練習していたという特徴がある人もいた。しかし、これもトレーニング環境が整っていたという外からの働きかけにより、モチベーションが維持されていたと考えることができる。部員はそれぞれ、活動休止期間で自分の競技・部活動への向き合い方を見つめ直し、部活動を続けるうえで譲れないものを見いだしていた。

在宅介護を経験した男性介護者に学ぶ  
—介護の継続と精神的支援としての同伴

**【研究目的】**

本研究は、男性介護者が介護へ適応するにあたり、どのようなことを支えにして生活を営んできたのかを把握し、どのような社会的支援が彼らにとって重要なのかについて示唆を得ることが目的である。具体的には、1) 在宅介護はどのように継続されたのか、2) 男性介護者はどのような支援を肯定的に評価したかについて検討する。

**【研究対象者・研究手法】**

要介護3以上の配偶者または親の在宅介護を3か月以上にわたって経験し、対象者募集時より前に介護が終了した男性を対象とした。本研究の男性介護者は、要介護者の家族であり、介護を主として行う人物とした。対象者3名に1～3時間の半構造化インタビューを行った。録音したインタビュー内容を逐語に起こし、ナラティブ分析を行った。

**【分析結果・考察】**

本研究の対象者3名は、最初は介護の知識に乏しく、介護に慣れている家族や看護師、ヘルパーらに教わって在宅介護に必要な知識や技術を獲得し、介護体制を構築しようとした。対象者3人はそれぞれが自分のやり方に固執せず、医療福祉従事者や家族からの支援を受けていた。人とのつながりを大事にする、自分のやりたいことを続けるなど、気分転換の方法を保持して生活を営んでいた。自分の行う介護に対して自信をつけ、在宅介護の見通しをもつ者もいた。3人とも孤独感や犠牲感をもちつつ、男性である自分が介護できることの利点や要介護者に対する肯定的な感情を見出し、自宅での介護生活を続けていた。介護技術の上達や慣れとは別に、要介護者の症状が悪化することがあり、介護を継続する一方で離職を選択する者もいた。

対象者3名は、看護師やヘルパーなど医療福祉従事者からの物理的な支援とともに、彼らの存在そのものを肯定的に捉えていた。頼れる者がいない、弱音は吐けない対象者にとって、信頼できる医療福祉従事者が自分の置かれた境遇とともに体験してくれることは、対象者が新しい環境に適応するために必要だった。介護者は自らの生活の維持に加え、それまで知らなかった知識や技術の習得、治療の種類を選択などを求められる。男性介護者が介護を行うと決めてから、介護について主体的に学び、介護に馴染んでいく過程を同伴することは、男性介護者への重要な社会的支援のひとつになると考えられた。

通常学級内における ADHD 児への対応：  
小学校教員の生徒の個別指導の体験に焦点を当てて

**【研究目的】**

本研究では、ADHD と小学校低学年時時点で診断された児童を担当した小学校教員の、生徒の個別指導の体験に焦点を当て、通常学級内でどのように ADHD 児を対応したのかを明らかにした。具体的には、児童の 1) 対人面と 2) 学習面の指導に焦点を当てて検討をした。

**【研究対象者・研究方法】**

本研究では研究対象者を小学校低学年時（小学校 1～3 年生）に、既に ADHD と診断されていた児童を担当として受け持ったことがある小学校の教員を対象とした。対象者 3 名に 40～50 分程度のインタビューを行った。インタビューの内容は録音した上で逐語録に起こし、ナラティブ分析を行った。

**【分析結果・考察】**

インタビュー分析から研究対象者が、1) 対人面 2) 学習面 において、ADHD 児に対してどのような指導方法を行っていたのかが明らかになった。

対人面において、ADHD 児がトラブルが起こってしまった際には状況を説明し、行動を改めるように促す声掛けの工夫がみられた。また、説明する際に「視覚的に」物事を説明することが効果的であると考えており、口頭のだけでなく字や絵を使って指導を行っていたことが明らかになった。また、他のクラスメイトへの働きかけとしては、ADHD 児の特性や性格の理解を求めたり、個別に対応していることに関しての理解を求めるような声掛けをし、周りが ADHD 児を受け入れる環境を整えていたことが明らかになった。

学習面においては、対人面の指導同様、絵や字、等の視覚的に認識できるもので説明をしていた。結果的に、ADHD 児だけでなく、他のクラスメイトにとっても分かりやすくなるような指導方法であったことが明らかになった。また、三つの分析において、学習面においても、ADHD 児に対して個別な対応を行っていることに関して、他のクラスメイトへの声掛けが最重要であった。ADHD 児にとって、学級内が困難の無い居心地の良い場所となるためには、担当教員が行う授業中の態度や学習指導だけでなく、他のクラスメイトが ADHD 児の特性や性格に関して、また個別な対応を受けていることに関して、理解を得ることが大事であることが明らかになった。



## 夫の定年退職と夫婦関係の変容

### —家事分担をめぐるコミュニケーションに着目して—

#### 【研究目的】

本研究は、夫の定年退職後の夫婦関係のあり様を妻の側から検討した。「妻が家事をするべきだ」という根強い妻の役割意識に配慮しながら、家事分担をめぐる夫婦のコミュニケーションを検討することで、人生後半における夫婦の関係性について考察した。

#### 【研究対象者・研究手法】

夫が定年退職後に家事を行うようになった夫婦の妻を対象とした。夫が家事を始めてから2・3年経っており、夫と家事を分担することに慣れてきた専業主婦で、夫の家事遂行が夫婦関係により変化をもたらしたと感じている方を対象にした。対象者4名に半構造化インタビューを実施し、インタビュー内容を録音して逐語に起こしたうえ、ナラティブ分析を行った。

#### 【分析結果・考察】

対象者らの夫が家事をしないという不満は、夫と対等な関係ではないという思いの表れであった。夫婦関係を満足したものにするには、家事を均等に分担することが必要ではない。夫婦がお互いを思いやり対等な関係であると感じられることが重要であると思われる。

伝統的性別分業意識として、女性が家事をするものだという考えの他に、女性が行う家事や育児、仕事に比べて夫の仕事は大変な仕事だという考えも対象者らの語りからみられた。対象者らは、夫が妻より上位であるという考え方を根本的に持っている。

コミュニケーションは、一方通行ではなく双方向に行われることで夫婦関係を満足させる。お互いへコミュニケーションを取るには、相手が自分のメッセージに応じてくれるという信頼が重要である。また、相手から自分に関わろうとする姿勢を感じることで、より相手とコミュニケーションを取りやすくなる。夫への信頼があるから家事を頼む人がいる一方で家事から夫への信頼を獲得する人がおり、夫からの関心に気づき夫に頼るよう考えを変える人がいる一方で夫からの関心を求めて家事を要求する素振りを見せる人もいた。家事と夫婦の関係性は相互に影響し合っているが、夫婦関係の変化が家事行動を通して行われているといえる。

働き盛りに子育てをする忙しい時期には、伝統的性別分業意識を基にして家庭生活を営むこともあって、夫婦間での会話が減り関係が希薄になる。退職後、夫婦だけになるため、コミュニケーションの在り方を見直し、二人の関係を新たな段階へと導くことが生活の質を高める。家庭生活上で最も身近である家事を通して夫婦が関係性を深めていく様子が見られた。妻は、夫は自分に応えてくれるという信頼や夫からの関心を拠り所として、夫へのコミュニケーションを取る。夫が家事をしないことを妻は不満を感じるが、それは家事分担を担ってほしいという要求ではなく、夫からの関心や夫への信頼によって夫婦の関係性を良くしたいという妻の思いの表れであった。

## 外国人留学生の日本での就職活動の検討

－就職支援に辿り着くまでの過程に焦点を当てて－

### 【研究目的】

本研究では、来日した外国人留学生が、日本の民間企業に就職するまでの体験に焦点を当てる。具体的には、1) 日本での就職活動を志した背景、2) 就職活動で困難に陥った出来事、3) 困難を経験して就職支援に辿り着くまでの過程、4) 就職支援リソースの利用や就職活動の経験による気づきや変化 以上の4点について検討する。

### 【研究対象者・研究手法】

日本の四年制大学に留学生として籍を置き、卒業後、日本の民間企業に就職するに至った、現在20代の方を対象とした。国籍や性別は問わないこととした。研究の同意を得た4名に30分から60分程度の半構造化インタビューを実施し、ナラティブ分析を行った。

### 【分析結果・考察】

日本で就職を希望する外国人留学生は、母国における仕事の待遇面や経済状況、政治事情などに鑑みて、帰国は選択肢になく、大学卒業後も日本で生活したいという強い思いが存在していた。外国人留学生が大学卒業後も日本で暮らしていくためには、仕事を見つけることが第一の要件となっている。日本での生活を強く望む留学生は、就職活動に対して大きなプレッシャーを抱えていることが明らかとなった。

就職活動における困難さは、主に外国人留学生特有の背景や環境が関わっていた。就職先が見つからないと在留資格が失効してしまうことへの焦りや、就労ビザを申請する際の不安などがあり、在留資格に関する心配事は、就職活動を行う外国人留学生にとって切実な悩みであった。周囲に帰国を選択し、就職活動を行わない留学生がいる場合、就職活動に関する情報の共有や悩みの相談の際に頼ることができず、孤立することも明らかとなった。企業の外国人留学生の採用方法に対して、理不尽さや憤りを感じ、就職活動にストレスを感じた事例もあった。

外国人留学生は、就職活動においてそれぞれ困難な状況に陥っていたが、4名全員が日本で生活したいという希望や、帰国したくないという強い思いが原動力となって就職支援に辿り着いていた。就職支援の利用によって、就職活動の結果に結び付かなかった人がいたが、働き方やその価値観を見直すきっかけとなったことで、より良い選択へと繋がっていることが明らかとなった。